

アメリカにおける臨床牧会教育と真宗僧侶

龍谷大学 打本弘祐

一 はじめに

東日本大震災以降、公共空間での活動を目的とする日本版チャプレンの臨床宗教師や浄土真宗本願寺派によるビハール僧養成等が組織的に始まった。それらの教育プログラムは共通してアメリカの臨床牧会教育 (Clinical Pastoral Education、以下CPE)⁽¹⁾ をモデルとしている。CPEは、一九二〇年代にアメリカにおいて病院等の施設付き牧師であるチャプレンを専門的に養成するために始まり、現在では臨床宗教育の世界基準として認知されている。日本では一時衰退するも、二〇〇〇年代から医療を中心としたスピリチュアルケア提供者の需要増加に際して格好で、筆者を含め仏教者が国内で日本版CPEを受講・修了し、その後、指導者として臨床宗教師やビハール僧教育に携わるようになった事で再注目されつつある。

近年、開教使や渡米してCPEを受講する真宗僧侶が存在するが、本研究では、これまで見落とされていたCPE受講者の先駆者である米国仏教団開教使の青山徹之氏 (以下、敬称略) を取り上げる。青山が受講した当時は、現在の主流である臨床牧会教育協会 (Association for Clinical Pastoral Education、以下ACPE) が設立された

直後であり、非常に柔軟で多様な教育を提供するCPEが、少数者への配慮を大きな課題としていた時期とも重なりあう。

こうした時期に受講した青山の足跡と意義を明らかにするため、本研究では、まず先行研究を確認した上で、文献学的手法によって先行研究や青山に関係する著作を精査し、略歴とCPE受講から修了までの経緯を明らかにする。そしてCPE研究の視点を加え、ACPE設立後間もない時期のCPEの教育内容と、キリスト教色が濃厚なCPEに初の仏教者として青山が受講許可された背景を明らかにし、これまでキリスト教文脈から語られてきたCPEに新たな視座を提示することを目的とする。

二 先行研究の確認―北米開教史研究の観点から

これまでのCPE経験者らの論考及びチャブレンに言及するビハークラ活動関連資料には、管見の限り青山に言及しているものはない。そのため足掛かりとして北米開教史研究を参考にする。

青山については、*Buddhist Churches of America: A Legacy of the First 100 Years* (San Francisco: Buddhist Church of America, 1998, p. 145) に経歴が掲載されており、⁽¹⁾ 駐在していたメリスビル仏教会の七十五周年を記念して発行された *Marysville Buddhist Church 75th Anniversary* (Marysville, CA: Marysville Buddhist Church, [1982], p. 13、邦題『メリスビル仏教会七十五年史』) に本人の祝辞が確認できる。⁽²⁾

国内の研究に目を移すと、北米開教百周年を記念して一九九六年に発行された武田龍精編著『親鸞とアメリカ―北米開教伝道の課題と将来―』冒頭の武田論文は、北米開教伝道に関して「龍谷大学大宮図書館でさえ、基礎的資料がまったく無いといっても言い過ぎではないほど所蔵されていない」と指摘する。だが、一九九六年以前に青山

自身によって著作が同図書館に寄贈されていることから、見落とされた可能性が高い。また同書にはアメリカ開教使への聞き取り調査が簡潔にまとめられており、青山の項には経歴とチャブレン経験の貴重さへの言及がある。だが、著作に関しては「臨床経験にもとづくいくつかの著作を記されている」との記述に留まり、書名は記されていない。⁽³⁾

次に武田龍精編『親鸞思想と現代世界IV 海外伝道資料集(第一集) 北米開教区』(永田文昌堂、一九九七年)には、北米開教区の実態調査によって収集された各仏教会の寺報・小冊子・伝道資料・法話集などの抜粋が掲載されており、同書中の「メリスビル仏教会」の項に青山の *Reaching Out* から英文小論二篇が転載されている。さらに同書には、米国プレスノに当時在任していたエッセイスト野本一平⁽⁴⁾ による *Reaching Out* への書評とおぼしき短篇と、同氏「念仏風土記―病人カウンセリング―」にチャブレンとしての青山の働きが収載されている。後者には青山のCPEの最初のスパーヴァイザーであり、当時のACPE会長の Albert L. Meiburg の著書 *Sound Body, Sound Mind* から、青山に言及した箇所の翻訳・引用がある。その中に青山がCPE初の仏教徒であると明記されている。⁽⁵⁾

最後に、中西直樹『仏教海外開教史の研究』は、戦前を中心に広く開教使や北米開教に携わった人々の著作を列挙しているものの、青山の著作への言及はなされておらず、戦後の記念誌の一つとして『メリスビル仏教会七十五年史』が確認されているに留まる。⁽⁶⁾

これらの研究が発表される以前に青山の著作が存在していたにも関わらず、北米開教史研究においては僅かに触れられる程度であった。この事実は、これまで北米開教史研究の中でCPEへの関心度が低かったことを物語っている。⁽⁷⁾

三 青山徹之の著作について

現在、青山の著作には日本国内で出版された四冊、アメリカで出版された二冊があり、英書のうちの二冊がスペイン語訳されている。⁽⁸⁾ 現在は全て龍谷大学大宮図書館に収蔵されている。以下、年代順に①から⑦として列挙し、CPEに関連する箇所について解説を加えておきたい。

①『わが在米開教生活随想録—Experiences in Clinical Pastoral Education: The View of a Jodo Shinshu Minister—』(宝林会、一九七七年)、非売品、全一八四頁。

青山の最初の著作であり、メリスビル仏教会七〇周年記念ならびに青山の生家、浄明寺大遠忌法要を記念して日本で出版された。和文篇二一篇(計一一一頁)と、CPE経験をまとめた英文篇十一篇(計六五頁)が収載。CPEに関係する邦文篇は、二一篇中一〇篇である。

②『ある宗教カウンセラーの記録』(永田文昌堂、一九八〇年)、全一八四頁。

全三五篇からなる。そのうち二七篇は、メリスビル仏教会会報ならびにアメリカの邦字新聞である「北米毎日」と「日米タイムス」からの転載である。また他八篇は、①の一部を再掲している。青山は本書を「いずれも宗教カウンセリングの教科書ではなく、実際のケースを、出来るだけ分かりやすく、体験的に書いていったもの」と位置づけ、三五篇中、CPEやチャプレン経験にもとづくものが二二篇ある。

③『親いころ 子いころ—続ある宗教カウンセラーの記録—』(永田文昌堂、一九八四年)、全二六六頁。

邦文篇全三〇篇(全二七七頁)と、CPEに関連する①の英文篇に一〇篇を追加して再編集された *Reaching Out—Experiences in Clinical Pastoral Education* という英文篇十九篇(全八九頁)からなる。

④ *Reaching Out: Experiences in Clinical Pastoral Education* (Marysville, CA: Horin-kai, 1993) 全二二〇頁。

青山のメリスビル仏教会駐在二〇周年記念を記念してアメリカで出版された。同書は米国仏教団や英語圏仏教寺院、地方病院、ホスピスや看護協会、そして国内では西本願寺、龍谷大学に寄贈された。⁽⁹⁾ この書の一部は③にも収められている。全三章からなり第一章の十三篇がCPEに関連する。十三篇はそれぞれ邦訳され、青山の著作に分散して収録されており、①の六篇、②の四篇、③の二篇が対応する。なお、①の英文篇から新聞記事一篇の転載がある。

⑤ *You Are Not Alone!* (Marysville, CA: Horin-Kai, 1996) 全一七二頁

全六章からなり、そのうちCPEについては第二章「Clinical Pastoral Education」の六篇が該当する。それらはいずれも①②の邦文篇から抜粋・英訳されて収録されている。また、Meiburgが序文を寄稿している。

⑥『一人ではない—異国での生と死—』(百華苑、一九九九年)、全一一七頁。

青山の父の二十七回忌と母の往生を機縁として出版された法話集であり、一四篇からなる。チャプレン経験に関するものは三篇であり、残りはアメリカにおけるホスピスやボランティア、葬儀事情などが記されている。序文を武邑尚邦、あとがきを青山の兄・青山隆夫が寄稿している。

⑦ *No Estas Solo!* (Penryn, CA: Nembutsu Press, 2004) 全二〇九頁。
You Are Not Alone! のスペイン語訳がある。

以上、著作全般に言えることとして、英文からの邦訳またはその逆の場合が多くある。また、CPE関連については、初期の①②③から抜粋されて一九九〇年代の著作に再録されている場合が多い。よって青山のCPE関連記録としては、主に初期の①②③が検討の中心となる(⑦については⑤の翻訳であり、本稿では取り扱わない)。ただし、邦文篇はCPEが知られていない日本の事情を考慮してか、対応する英文篇と比較すると具体的内容の省略が認められる。その点に注意を払い、青山のCPE経験を論じる必要がある。

なお、本研究における記録の取り扱い方の視座をここで述べておきたい。CPE創始者の一人 Anton T. Boisen によって「生きている人間の記録 (living human document)」に学ぶ神学教育となったCPEは、研修生の生育歴や受講動機を重要なものとして丁寧に取り扱う。この観点から、青山の半生を記録から浮き彫りにする必要がある。さらに、松本信愛が指摘するように、CPEはACCPEに認定されたスーパードクターのもと、研修施設の特徴、地域性、グループメンバーの構成などによるプログラムの多様性が認められている⁽¹¹⁾。それ故にCPEを論じる場合、経験者によるCPEの記録一つ一つが貴重な事例研究資料となる。これらを念頭に上記の資料を通して青山の足跡を辿ることとする。

四 青山徹之の略歴—出生からCPE受講終了までを中心に—

先に確認した資料を元に、まず青山の略歴について、出生からCPE受講終了までを中心に明らかにしておきたい。

青山は、一九四〇(昭和一五)年十月に、富山県婦負郡八尾町青根にある浄土真宗本願寺派宝林山浄明寺住職、青山智演と住栄の間に次男として生まれる。

青山の祖父である青山毅軒は、一九〇三(明治三六)年からしばらくの間ハワイのオーラ本願寺に駐在した後、ヒロ本願寺第六代開教使として赴任し、同寺駐在時は本堂や庫裏の新築に奔走したようである。帰国後は浄明寺に戻っている⁽¹³⁾。

父である智演は一九〇六(明治三九)年に富山県氷見市日名田に生まれる。旧制七尾中学校を経て上京し、東洋大学予科、日本大学を卒業した後、一九三〇(昭和五)年に浄明寺へと養子として入寺した。結婚前の数年間は大連の本願寺別院に勤務し、大谷光瑞から指導を受ける機会があり、また花田正夫とも交流があった。母となる住栄は一九一一(明治四四年)に富山県富山市豊田に生まれる。

二人は一九三七(昭和一二)年に結婚し、四男一女をもうける。その後、智演は住職の傍ら民生委員や保護司を務め、一九七三(昭和四八)年に六七歳で往生した。智演の二七回忌にあたる一九九九(平成一一)年に往生した母の住栄を偲んで、青山の六作目にあたる「一人ではない—異国での生と死—」が兄弟と妹の尽力によって出版されている⁽¹⁴⁾。

祖父と父が海外開教に従事していたことから、青山本人も開教使を目指し、一九六四(昭和三九)年に龍谷大学仏教学科を卒業後、同年に同大学大学院に進学。一九六六(昭和四一)年に修士課程を修了し、同年九月二六日に米国仏教団の開教使として渡米する。

渡米後、一年間は米国仏教大学院で学び、一九六七年から一九七〇年の三年間を初代マリン郡仏教会開教使として過ごす。その後、米国仏教団北米開教総長辻頭隆の命によって東海岸へ派遣され、一九七二(昭和四六)年一月二四日にコネティカット州に到着し、イエール大学神学部研究員となる。

そこで受けたいくつかのカウンセリング関連講義の一つが、イェール大学のニューヘブン病院における Edward Dobial をスーパーヴァイザーとする教会カウンセリング実習であった。受講中、青山は知り合いのいない東部の生活による過度の孤独感を抱えた。さらに流感罹患による高熱で病床にある中、病床を訪問した Dobial によって温かなケアを受け、体調回復後に Dobial の勧めによって入院患者訪問の機会を得る。病院内で孤独に過ごす患者の姿に自らを重ね、献身的に患者の病床訪問を重ねる青山を見て、Dobial はひと月も経たないうちにより多くの患者訪問を割り当てた。そして青山と彼が関わる患者の様子を注意深く観察していた Dobial は、三ヶ月を経過した時に、正式に仏教徒として初となる CPE 受講を青山に勧める。青山は Dobial による推薦を述懐して次のように述べている。

今まで、このプログラムはキリスト教徒だけのものであったが、仏教徒である私にも、正式にこのトレーニングを受けさせてやりたいという厚意に満ちたお話しであった。⁽¹⁵⁾

この Dobial の推薦と、後に述べる辻賢隆の尽力によって青山はニューヨーク州のローチェスター・ストロング・メモリアル病院における CPE に、仏教徒として、また真宗僧侶としても初めて参加することになる。

同病院の主任スーパーヴァイザーは、当時 ACCPE の会長であった前出の Meiburg であり、アシスタントスーパーヴァイザーは Ken Dean であった。また、それまでは CPEI から CPEIV までの四コース制であった CPE が、青山が受講した年から基礎コース (Basic)、上級コース (Advanced)、スーパーヴァイザー養成コース (Supervisor-in-training) の三コースに変更され現在に至っている。⁽¹⁷⁾ よって青山は、真宗僧侶として初の CPE 受講者であるばかりか、現在に至る三コース制 CPE 初の研修生のうちの一人にもあたる。⁽¹⁸⁾

青山は Meiburg の下で三ヶ月のチャプレンのインターンを終え、Meiburg の推薦を得て、一九七一年(昭和四六)年十月からは、病院から給与を受けつつ CPE を継続するレジデンシーとして、コネティカット州ハートフォード病院と一年契約を結ぶ。このときのスーパーヴァイザーは Wendell Stephen と William Boone であった。九ヶ月間主任スーパーヴァイザーとして青山を指導した Stephen は、他のスーパーヴァイザーと大きく異なった極めて非指示的なスーパーヴァイザーであった。しかし、Stephen は東部に単身の留学生として、さらに日本人仏教僧侶であるという極めて少数者の立場に置かれた青山の孤独を深く理解し、特別な対応として週末の家族旅行やクリスマスイブの晩餐へ誘うなど、病院外で家族ぐるみの温かな配慮を見せている。青山にとって Stephen は宗教を超えた師であり、また父のような存在であったようだ。⁽¹⁹⁾

さらにロサンゼルス市カリフォルニア病院で一九七二(昭和四七)年から一九七三(昭和四八)年にかけて、スーパーヴァイザーである Roger Johnson の下で学び、レジデンシーの立場を終えている。⁽²⁰⁾ なお、Meiburg が著書に青山がサマーセミナーで学んだと記していることから、Meiburg の下で夏期集中型の基礎コースを修了し、レジデンシーの立場で病院に勤務しつつ、上級コースを受けていたと考えられる。

CPE 終了後、青山はメリスビル仏教会開教使を務めながら、カリフォルニア州メリスビルのレストヘブン精神病院でチャプレンとして、また米国仏教大学院やユーバ大学で非常勤講師を務めた。開教使を退任後、病院でのボランティア活動を継続していたが、二〇一九(令和元)年十月四日に七八歳で人生を終えた。

五 青山徹之の CPE 経験

CPE は臨床実習とグループワーク、個人スーパーヴィジョンが実習先病院内で繰り返されながら進んでいく。

そこに別途課題などが加わる。ここでは青山が受講したCPEを一つの事例として臨床実習先の病棟と臨床実習の内容、グループワークなどについてまとめ、その特徴を述べておきたい。

まず臨床実習病棟であるが、CPE研修生は一人のチャプレンとして危機的状況にあるどのような患者にもケアを提供するため、自らに特定の課題が有る場合を除いて、与えられる研修先病棟や出会う患者は多種多様である。青山の場合も同様に、割り当ての病棟は精神科、化学療法科、救急科、外科などであり、ケア対象者も末期がん患者、手術後の患者、統合失調症の患者、自殺未遂者、中絶を考える女性、死亡宣告後の家族など様々の事例が述べられている。また、当時のアメリカの状況もあって、多彩な人種への対応に直面したことが記録されている。

次に、青山が受講したCPEの具体的内容については、Meiburgの下でのインタビュー時の記録に集中しているが、その他は著作に分散的に記述されているため、以下にまとめておく。

まず臨床実習では、毎日の病院内における巡回、割り当て患者への直接面接、面接後の面接記録の作成といったルーティン業務と、夜間のオンコール対応が記録されている。

次に、グループワークについては、グループメンバーの構成や頻度を確認することができないものの、「人間関係セミナー」、「説教実習」、「同僚間個人評価」、「会話記録検討」、「結婚カウンセリング」が行われていたことが確認できる。

このなかでも「会話記録検討」における患者との会話記録そのものが、邦文・英文著作の両方に多数残されていることは注目に値する。日本において一九七〇年代におけるCPEの実際の会話記録は、現在のところ青山のもの以外に確認できず大変貴重である。特に真宗僧侶として関わったカトリックの患者との会話記録や、キリスト教患者からの祈りという宗教的ニーズへの対応に関する会話記録は、現在議論されつつある日本における異宗教間ケアに関する研究にとって示唆的な資料となる。

スーパーヴァイザーとの関わりの強い個人スーパーヴィジョンについては、Stephenとの関わりと、インタビュー時代のMeiburgとDeanによって毎日行われたと記録されている。

なお、CPEには、研修生の性格や生き方を検討しながら人格的に陶冶する一環として生育歴のグループワークがある。⁽²²⁾青山も経験していたと推測するが、記録には生育歴のグループワークについて触れられていない。⁽²³⁾

その他に、前述の松本も述べているブックレポートや、自己総合評価の作成、⁽²⁴⁾時期は不明だがスーパーヴァイザーとの間でユング派の夢分析を応用したトレーニングが毎日行われていた頃もあったと記録されている。⁽²⁵⁾夢分析は他のCPE経験者の記録から確認できないものであり、当時のスーパーヴァイザーの独白色が垣間見えて興味深い。なお、これらの開催頻度については個人スーパーヴィジョンと夢分析以外不明である。

以上が青山の著作から伺えるCPEの具体的内容であり、アメリカでCPEを経験したキリスト教者と同等であると捉えて良いだろう。⁽²⁶⁾しかし、個人スーパーヴィジョンの頻度やスーパーヴァイザーとの詳細な関係性、夢分析などは他には見られない青山のCPE記録の特徴である。さらに、真宗僧侶である青山による会話記録上に見える異宗教間ケアの記録は、仏教者でなければ経験できない希少な記録として捉えられる。

六 CPE受講と北米開教総長辻顕隆

どのような場面でも研修生の能動的かつ臨機応変な対応が求められるCPEは、「参加する際のシステムそのものが本人の意思が尊重されるもの」⁽²⁷⁾である。では、青山がCPEを受講した動機はいかなるものであったのだろうか。

そもそもイエール大学神学部留学の目的は、開教使として赴任間もない頃に仏教会に所属する婦人から病院で求

められた「お祈り」に困惑したことが「宗教カウンセリングの道への、一つの、大きな糸口であった」と述べていること(28)から、牧会カウンセリングの学修であったことに間違いない。

だが、青山が当初からCPEの存在を認知していたかは記録から看取できず、またキリスト教者のような召命観から生じる動機も語られていない。よって、イエール大学で出会った青山の最初のスーパヴァイザーである Dobial によって初めてCPEの存在を教えられ、受講を勧められたと考えるのが妥当である。

また筆者は、青山のCPE受講を米国仏教団側から後押しした人物として、当時の北米開教総長辻顕隆の存在を指摘しておきたい。青山はCPE受講に至る留学について、辻の「命」によって留学したと再三述べており、第一作の英文篇謝辞にはバークレーの米国仏教大学院を通じて自分のCPE受講が可能になり、それが辻の手紙によると記されている。(29)

CPE受講は、四年制大学を卒業後、神学校または大学院において神学(教学)⁽³⁰⁾を修めていること、すなわち自分が信仰する宗教宗派の教義を一定レベルで理解をしていることが必須条件であり、その上で、医療現場が必要とされる知識や医療者との連携、患者との具体的な関わり方などを医療機関における臨床実習を通して学ぶのである。よって辻が当時の北米開教総長の立場から、青山の大学院教育修了の証明などの為に関与していたと考えるが、辻が青山のCPE受講を後押しした根拠を補強する意味で、彼の人物像を考察しておきたい。

辻はカナダに生まれ、日系二世として初めて北米開教総長となった人物である。トロントで開教活動を行っていた辻は、一九五八(昭和三三)年に、当時カナダ教区を含めて管理をしていた米国仏教団重藤総長の依頼によって仏教や浄土真宗の教化伝道活動を目的として新設された教化部のディレクターとして招聘された。

藤原ワンドラ陸の研究によれば、辻は日本仏教の伝統を軸としながらもアメリカで通用する仏教のあり方として、多元的共存における融合性を鍵概念に挙げ、多人種で構成されるアメリカ社会において、浄土真宗がその環境に融

合しながらも仏教としての特異性を明確に提示する必要性を主張したという。⁽³¹⁾

ここから筆者は、辻が主導していた米国仏教団教化部の活動の中でも「宗教相互間における対話」と「開教使教育」を念頭に置いて青山を後押ししたものと推察する。当時のアメリカ社会において存在が認知されていたチャレンの養成教育であるCPE受講は、必然的に他宗教者との「宗教相互間の対話」となり(例えば「説教実習」が該当)、そのことは辻が主張した多元的共存における融合性にも繋がる。また、メンバーの病床訪問を行う開教使にとつて、臨床実習における牧会カウンセリングの技術やその実際は、必然的に「開教使教育」に資するものとなる。

あくまで推測の域を出ないものの、筆者は辻が総長の立場からそれらの一環として若き開教使であった青山に期待をかけ、チャレンを開教使が担う新たな役割と見据えて、イエール大学神学部への留学を命じ、さらにはCPE受講を後押ししたものと捉えておきたい。⁽³²⁾

七 少数者としての意識

次に、仏教者のCPE受講許可に当たって、受入れ側であるACPEの事情や当時のCPEを取り巻く社会状況の変化をより鮮明に描き出すために、まず青山自身が抱えた少数者としての意識に焦点を当てる。

青山はCPE経験を「トレーニングは、非常にづらいものであった」と表現し、ハートフォード病院のレジデンシー時代には、非常に大きなストレスを抱え、神経症に罹患しかけたことさえ告白している。他の経験者と比較して、CPEの内容は大差なくとも質的差異を強く感じさせる。CPE独特の多忙さもさることながら、筆者はその原因がイエール大学研究員として最初のスーパヴァイザーであるDobialに師事していた頃から抱えていた多重

的な少数者としての青山の立場にあると考える。青山はローチェスター・ストロング・メモリアル病院における牧会カウンセリング臨床実習を回顧して次のように述べている。

臨床カウンセリングの実習を行っている私にとって、語学の問題、日本人である事、仏教の開教使である事というこの三点が、ドビホル氏のクラスにあっても、病院においても異常であり、まわりから興味のみで見られていた事は事実である。⁽³³⁾

また同様に、次のようにも述べている。

東部地方ではキリスト教が盛んなので、毎日の私の生活感覚は、キリスト教徒のど真中に他宗の私がいることは水の中に一滴の油があるような感じで、異分子的な存在であった。病院内でも、毎日キリスト教のお祈りがあり、そのたびごとに、私だけは、心の中で小さくお念仏を称えていたものだった。⁽³⁴⁾

これらの述懐から、青山自身がキリスト教の色濃いアメリカ東部において、CPE受講前の牧会カウンセリングの講義や病院実習を受ける中で、日本人留学生として人種的に少数者であり、語学面で困難を抱えていたこと、何より真宗僧侶として宗教的にも少数者であったことから、異質さや寂寥感を感じていた事が明らかである。⁽³⁵⁾ しながら、このような心境にあった青山がCPE受講を許可されたのは、実はこの多重的な少数者という立場にあったことも要因にある。

八 ACPPE設立と少数者への配慮—人種・留学生・宗教—

青山がCPE受講を許可された当時、一九六七（昭和四二）年に設立されたACPPEは、様々な少数者の配慮に関する課題を抱えていた。ここでは青山の立場に即して、第一に人種、第二に留学生への配慮、第三に宗教的少数者への配慮について、それぞれ牧会神学に関わる研究者の指摘を踏まえて論じる。

まず人種への配慮について、ACPPE二代目会長であるCharles V. Gerkinは、一九七〇年代からアメリカで生じた西洋文化とその不正や不平等に関わる意識が刷新され、文化の多様性への尊重がCPEを含む牧会学に大きな影響を及ぼしたことを指摘している。Gerkinは白人文化が支配的であったCPEの中で、まずアフリカ系アメリカ人に始まった文化的独立心や誇りを持った存在の主張が、彼ら自身への、そして次第にヒスパニック系アメリカ人やネイティブアメリカンが持つ文化的異質性への配慮に繋がったと述べている。⁽³⁶⁾ この態度が、患者やCPE研修生が抱える問題を個人の心理的な問題として単眼的に捉えていたCPEから、個人を取り巻く文化や歴史の社会的文脈へ複眼的に視野を広げたCPEへと変化するように促していった。Gerkinは明確に日系人について言及していない。しかし、当時のCPEにおいて非白人系であり、文化的差異が尊重される立場にある存在として、日本人の青山を位置づけることができる。

次にCPEにおける少数者への配慮について、Edward E. Thorntonが「倫理的認識の問題」の中で、ACPPE設立後の一〇年間はCPEの中で少数者のニーズへの気づきが迅速な広がりを見せた時期であると指摘している。Thorntonは具体的に黒人や女性達が彼らのニーズに自覚的に声を上げていったことに端を発し、⁽³⁷⁾ ゲイやレズビアンのスーパードクターがCPEの中で自らの居場所を主張し、それが性的少数者のCPE研修生へのスーパード

イジヨンの検討に繋がったこと、さらにこの時期から留学生のCPE研修生に細やかな配慮もなされてきたと述べている。⁽³⁸⁾

先に青山の語学的な不自由さについての述懐を確認したように、留学生のCPE研修生の多くは語学的な不自由さを抱えている。青山の記録しているカトリック信者のフランス人患者のケースの如く、移民国家であるアメリカの病院で過ごす英語を母語としない患者への対応と、語学的な不自由さを抱えた研修生の問題は、相似形として当時のCPEのグループワークで発生している。その実例が、青山の経験したレジデンシー時代の結婚カウンセリングのグループワークにおける録音テープ問題として記録されている。⁽³⁹⁾青山がテープの内容を語学的に理解できない旨をスーパーヴァイザーとグループメンバーに告げ、そのグループでは全員の合意にもとづいて録音テープを用いたグループワークが中止された。代替のグループワークが行われたかは定かではない。だが、このケースは当時のCPEにおける語学的不自由を抱えた留学生という少数者に対する具体的な対応事例として捉えることができる。

最後に、宗教的な少数者への配慮について、窪寺俊之はACPE設立後である一九七〇年代のCPEの課題には「宗教を異にする人たちへのケア」が含まれていたと言う。⁽⁴⁰⁾これは当時の多様な患者のニーズに対して、もはやキリスト教教派内での宗教的ケアでは対応しきれないという課題がCPEの中で浮かび上がっていたことを意味する。この点については、統合に至るまでのCPE諸団体について若干の補足を要する。

CPEは、一九三〇年代に会話記録検討やスーパーヴィジョンなど主要な教育方法が確立されていく中で複数の教育組織を生み出した。特に一九五〇年代以降は、ルター派のスーパーヴァイザーらによる牧会配慮教育協議会や南バプテスト教会臨床牧会教育協会といった教派名が冠された団体が設立され、その後もさらに幾つかの独立団体が誕生した時期であった。⁽⁴¹⁾しかし、一九六三(昭和三八)年に臨床訓練協議会と牧会配慮研究所が候補者を募り、互いのグループワークを観察し、批評しあうことによって、団体同士の協力関係が確認され、結果としてチャプレ

ンの共同認定へ大きく前進した。その後には教会協議会や神学校協会をはじめ様々な宗教的指導者の支持を獲得し、一九六七(昭和四二)年にCPE諸団体を統合したACPEが設立された。⁽⁴²⁾

このACPE設立は単に教育団体の統合を意味するのではない。臨床現場では研修生であっても一人のチャプレンとして扱われるCPEにおいて、当時のアメリカ社会の人種的・文化的・宗教的背景の多様化に伴う患者やその家族、医療スタッフの様々なニーズに応じるために、まずキリスト教が教派を超えて手を結び、従来の宗教的ケアとは異なったスピリチュアルケアを実現する方向性を明確にした出来事である。

さらに、急速に医療技術が進展していく病院において、「病者も生活者である」という視点を保持し、信仰生活の継続を目的としてきたチャプレンの役割に加えて、患者のスピリチュアルペインに耳を傾け、対話することによってスピリチュアルケアが成立するという理解が生まれ、さらにその専門性が宗教宗派の違いを越えて実現されるべきだというCPEの理念が発展していった。⁽⁴³⁾

筆者は、その理念の一つの具現化がACPEへの統合であると考え。すなわちアメリカのCPEはACPEへと統合されたことを契機として、研修生が直面する実際の患者のケアとその教育のために、宗教的多様性を求めて他宗教の研修生に門戸を開いていった。その端境期に青山のCPE受講が認められたのである。

九 小結

以上、青山のCPE受講に至る経緯とその教育内容について論じた。特に青山の受講動機に着目し、辻による支援の可能性を指摘し、一方で多重的少数者であった青山が日本人真宗僧侶として初めてCPE受講を果たした背景に、設立後間もないACPEが少数者への配慮を課題としていたことを明らかにした。ACPE設立の根幹にも関

わる少数者への配慮の具体例はこれまで国内で論じられていなかったが、青山の軌跡を通してその一端が明らかとなった。

当時ACPEの会長であったMeinburgが「私も彼から多くのことを学んだ」と語るように、青山がCPEに与えた影響は少なくない。多重的な少数者として抱えた苦悩は、スーパードクターやグループメンバールにとつてケアの課題となり、一方で青山自身もCPEの中でケアされる経験を通して、他の少数者が抱える苦悩に鋭敏になっていった。そのことは青山の著作に記されたゲイ、精神病者、離婚経験者などの事例から読み取れる。そこにはCPEを経た真宗僧侶が、チャプレンとして、また開教使としても、常に少数者の視点を持ち続けながら活動する姿が示されている。

【付記】本研究は、平成三十年度科学研究費助成事業基盤研究(C) (課題番号 JP18K00093 (研究課題名「医療現場における宗教者による「無宗教」者支援の実態と可能性」研究代表者山本佳世子)の助成を受けた成果の一部である。

【謝辞】本研究にあたって生前の青山徹之氏からご助言を賜った。またサンディエゴ仏教会から *Reaching Out* の寄贈を受けた。紙面をお借りして深く感謝申し上げます。

註(1) 青山はCPEやチャプレンを様々な訳しているが、本稿では臨床牧会教育とチャプレンで統一した。なお、青山は、チャプレンについて「医学・心理学に通ずる教誨師」としており、日本でのチャプレン理解促進の為の配慮が窺える(青山徹之「わが在米開教生活随想録—Experiences in Clinical Pastoral Education: The View of a Jodo Shinsu Minister—」宝林会、一九七七年、和文篇補註九七頁)。

(2) 例えば浄土真宗本願寺派ではACPE認定スーパードクターのJulie Hanada、北米開教区のサンマテオ仏教会開教使のHenry Adams、同サンフランシスコ仏教会の宮木Lee啓輔、ハワイ開教区コナ本願寺開教使Blayne Higashigaiらがいる。また、真宗大谷派では笠原俊典(稲荷山武田病院チャプレン)、瀬良信勝(亀田総合病院チャプ

レン)が知られている。

(3) 武田龍精「親鸞とアメリカ—北米開教伝道の課題と将来」(同氏編著「親鸞思想と現代世界I 親鸞とアメリカ—北米開教伝道の課題と将来」所収、永田文昌堂、一九九六年、二八頁)。

(4) 野本一平はペンネームであり、本名は乗元恵三である。乗元は開教使かつ元フレズノ別院輪番であり、北米毎日新聞社社長も務めた人物である。乗元は、野本名でロサンゼルスの日経新聞「羅府新報」に一九六五(昭和四〇)年から月一回コラムを執筆していた。(松本デービッド監修、川添泰信/那須英勝編集「厚の角—世界に拓く真宗伝道—」永田文昌堂、二〇〇五年、一四四頁参照)。また「念仏風土記」は「大乘」誌上に一五回連載された「アメリカ念仏風土記」であり、「病人へのカウンセリング」は連載第十回目にあたる(「大乘」三八「四」、一九八七年)。

(5) 武田龍精編「親鸞思想と現代世界IV 海外伝道資料集(第一集) 北米開教区」永田文昌堂、一九九七年、一七一頁。

(6) 中西直樹「仏教海外開教史の研究」不二出版、二〇二二年、四四〜四七頁参照。

(7) この他、西元宗助が「この世に生きる」(百華苑、一九八六年)の中で青山の活動に触れている。

(8) 国内ではこの他に、青山が一九八〇年代に「大乘」誌上へ寄稿した四本の小論が存在する。内容は、アメリカのホスピス事情と葬儀事情が各一本と、ハワイ開教使であった祖父の事績を巡る訪問記(上・下)である。

(9) 青山徹之「ある宗教カウンセラーの記録」永田文昌堂、一九八〇年、七頁。

(10) 青山徹之「一人ではない—異国での生と死—」百華苑、一九九九年、七八頁参照。

(11) 松本信愛「患者と家族の心のケア—米国のバストラル・ケアに学ぶ—」近代文藝社、一九九四年、一四九〜一八一頁参照。

(12) CPE受講記録を対象とする研究の意義と特色については、拙稿「キリスト教から何を学ぶべきか—バプテスタ病院牧師室研修を通して—」(法喜会編「慈光法喜—武田龍精先生喜寿記念—」所収、二〇一七年)をご参照頂きたい。

(13) 青山徹之「ハワイを訪ねて—随想・開教使の足跡(下)—」『大乘』第三五巻第六号、一九八五年。

(14) 青山隆夫による「あとがき」を参照(青山徹之「一人ではない—異国での生と死—」、一一三〜一一七頁所収)。なお青山の兄である青山隆夫は東北大学文学部教授を経て、ドイツ恵光日本文化センターで所長を務めた人物で

ある。

- (15) 青山徹之「わが在米開教生活随想録」英文篇、四一―四四頁参照。
- (16) 青山徹之「わが在米開教生活随想録」、六三頁。
- (17) Stephen D.W. King, *Trust the Process: A History of Clinical Pastoral Education as Theological Education* (Lanham, MD: University Press of America, 2007), pp. 84-85.
- (18) 青山徹之「ある宗教カウンセラーの記録」『はしがき』94―103頁、Albert L. Meiburg, *Sound Body, Sound Mind* (Philadelphia: Westminster Press, 1984), p. 37.
- (19) 青山徹之「ある宗教カウンセラーの記録」、三―八頁。なお、*Reaching Out* には、Stephen 夫妻の写真と共に、Stephen 没後の夫人とのやりとりが収載されている（青山徹之 *Reaching Out* [Marysville, CA: Horin-kai, 1993], pp. 54-55）。
- (20) 青山徹之「ある宗教カウンセラーの記録」、「はしがき」および三頁参照。
- (21) Meiburg, 前掲書、三七頁。
- (22) 窪寺俊之「ホスピス・チャプレンとスピリチュアルケア」『講座スピリチュアルケア学第一講スピリチュアルケア』所収、ペイング・ネット・プレス、二〇一四年、一一六頁。
- (23) 生育歴、会話記録検討、個人スーパーヴィジョンはCPEの流れを汲む日本のスピリチュアルケア教育および臨床宗教師やビハラ僧教育にも取り入れられている。
- (24) 青山徹之「親ごころ 子ごころ―続ある宗教カウンセラーの記録―」永田文昌堂、一九八四年、一四〇頁。
- (25) 青山徹之「わが在米開教生活随想録」、二四頁。
- (26) 管見の限り、この時期の日本人キリスト教者のCPE研修生には窪寺俊之と斎藤武、やや遅れるが一九八〇年に受講した菊池礼子がいる。
- (27) 菊池礼子「被抑圧者のための臨床牧会訓練の可能性を求めて」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』二六号、一九九三年。
- (28) 青山徹之「ある宗教カウンセラーの記録」、一一六頁。
- (29) 青山徹之「わが在米開教生活随想録」、一頁。
- (30) 窪寺俊之「スピリチュアルケア学序説」三輪書店、二〇〇四年、一〇七―一〇九頁。
- (31) 藤原ワンドラ陸「アメリカ真宗思想史の研究―モダニズムのなかの真宗から現代へ」学位論文、二〇一八年、龍谷大学学術機関リポジトリ、一六七―一六八頁参照、<http://hdl.handle.net/10519/7933>、二〇一八年四月二二日アクセス。
- (32) 辻は、青山の開教使としての経歴とCPE受講歴の紹介ならびに青山の宗教カウンセリングによる開教使活動の展開を期待して序文を寄稿している（青山徹之「わが在米開教生活随想録」、序文参照）。
- (33) 青山徹之「わが在米開教生活随想録」、五二頁。
- (34) 青山徹之「わが在米開教生活随想録」、五八頁。
- (35) CPEのスーパーヴァイザーであったMeiburgは、青山が語学的にも文化的にも困難を抱えていたにも関わらず、患者へ献身的にケアしていたことを称讃し、青山から学ぶことが多かったと述懐している（Meiburg, 前掲書、三七―三八頁）。
- (36) Charles V. Gerkin, 著、越川弘英訳「牧会学入門」日本基督教団出版局、二〇一二年、一〇二頁参照。
- (37) Robert Leas の指摘によれば、最初の五十年で認定されたスーパーヴァイザーは全てプロテスタントの男性牧師かつそのほとんどが白人であった。しかし、一九七四年に「eggs」が認定を受けた時、すでに認定されていた女性スーパーヴァイザーが二名いたとされる。よって青山が受講した頃は、女性スーパーヴァイザーが認定されスーパーヴァイザーにも多様性が生まれ始めた時期でもある（Robert Leas “A Brief History of ACPE & General Reading List”, <https://www.aope.edu/pdf/History/ACPE%20Brief%20History.pdf>、二〇一九年五月二八日アクセス）。
- (38) Rodney J. Hunter, ed. *Dictionary of Pastoral Care and Counseling: Expanded Edition* (Nashville, TN: Abingdon Press, 2005), p.179.
- (39) 青山徹之「ある宗教カウンセラーの記録」、四〇―四二頁。
- (40) 窪寺俊之「臨床牧会教育の歴史―アメリカでの初期の状況―」窪寺俊之他編著「スピリチュアルケアを語る第三集―臨床教育法の試み―」所収、関西学院大学出版会、二〇一〇年、二〇頁。
- (41) Gerkin, 前掲書、八三頁。
- (42) King, 前掲書、六七頁。
- (43) 伊藤高章「臨床スピリチュアルケア専門職養成―現代日本社会の必要に依えて」窪寺他編著前掲書所収、四四―

四五頁参照。なお、このような動きは同じ頃に起こった第二バチカン公会議以降の宗教間の対話や協力を想起させるが、CPEとの関連については今後の研究課題としておきたい。

(44) Meiburg 前掲書、三七頁。

CONTENTS

Articles

Shinran's Understanding of the 22nd Vow: Focusing on the Phrase "Elucidated in Tanluan's Commentary"..... IWATA Koei (Ôtani-ha)..... 1

The Meaning of a Word and Phase of "Junen" in the Wangsheng Lunzhu..... TÔYAMA Nobuaki (Hongwanji-ha)..... 22

Shinran's Quotations from the Bianzhenglun..... KIMATA Takuma (Ôtani-ha)..... 46

The Acceptance and Development of "Karunâpuṇḍarika Sûtra" in Shinran..... MITSUKAWA Makoto (Ôtani-ha)..... 69

SHICHIRI Gojun's Thoughts on Charity..... KANEMI Ringo (Ryûkoku University)..... 89

Clinical Pastoral Education in the United States and Shin Buddhist Minister..... UCHUMOTO Koyu (Ryûkoku University)..... 103

The Fulfillment of the Returning Aspect of Merit Transference..... KAKU Takeshi (Ôtani University)..... 125

The Fundamental Viewpoint on Kiyozawa Manshi's Theory of Finite and Infinite: Some Remarks on Its Significance in Shin Buddhist Studies..... FUJII Ryoko (Ôtani-ha)..... 155

The Subject of the Buddha-Body and Land on Shinran's Acceptance of the Nirvâṇa Sûtra: In Ligth of the Development from "the Chapter on True Buddha-Body and Land" to "the Chapter on Transformed Buddha-Bodies and Lands" of the Kyôgyôshinshô..... MATSUOKA Junji (Ôtani-ha)..... 177

A Study of the Daimyômoku Copied by Kenchi..... FUKAMI Keiryu (Hongwanji-ha)..... 194

A Study of "Ohimotoki no Goshô" on Takada..... KURIHARA Naoko (Takada-gakkai)..... 216

真宗連合学会規約

- 第一条 (名称) 本会は真宗連合学会と称する。
 第二条 (目的) 本会は真宗に關係ある學術の研究發達を圖るをもつて目的とする。
 第三条 (事業) 本会は前条の目的を達するために左の事業を行う。
 一、大会(年一回)
 二、学会誌の発行
 三、その他必要な事業
- 第四条 (会員) 真宗に關係ある學術団体、及び研究者並びに本会の趣旨に賛同するものをもつて会員とする。会員は別に定める会費を納めるものとする。
 (役員) 本会には左の役員をおく。
 一、理事長 一名 理事中より互選し、本会を代表して会務を統理する。
 二、理事 若干名 評議員中より互選し、会務(査読の業務も含む)を処理する。
 三、評議員 若干名 会員より選出する。
 役員任期は二年とする。但し重任を妨げない。
 (顧問・参与) 本会に顧問及び参与をおく。顧問及び参与は評議員の会議において推挙する。
- 第五条 (経費) 本会の経費は会費及び助成金その他の収入による。
 (年度) 本会の年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。
 (事務所) 本会の事務所は、次の所より理事会の議を経て決定し、二年ごとに事務を担当する。
 龍谷大学(京都市下京区七条通大宮東入大工町一二五―二)
 大谷大学(京都市北区小山上総町二二)
 高田学会(三重県津市一身田町豊野一九五)
 同朋大学(名古屋市中村区稲葉地町七一)
 京都女子大学(京都市東山区今熊野北日吉町三五)
 (規約の変更) 規約の変更は評議員の会議に附し、大会の承認を受けることを要する。
- 第十条 附則
 ① この規約は昭和二十九年十一月十四日より実施する。
 ② 平成六年六月三日一部改正。
 ③ 平成十五年六月六日一部改正。
 ④ 平成十六年六月四日一部改正。

令和2年1月20日 印刷
 令和2年1月30日 発行

真宗研究・第六十四輯

印刷所 中村印刷(株)

〒601-8133 京都市南区上鳥羽薬田29

編集兼 真宗連合学会
 発行 兼 真

代表者 一 楽 真

〒603-8143 京都市北区小山上総町
 大谷大学内
 TEL 075-432-3131

発行所 真宗連合学会

発売所 文栄堂

〒604-8091 京都市中京区寺町三條上る
 TEL 075-231-4712
 FAX 075-223-5243

ISSN 0288-0911

眞宗研究

眞宗連合學會研究紀要

——第六十四輯——

令和2年1月

眞宗連合學會

眞宗研究

第六十四輯

眞宗連合學會編

THE
SHINSHU KENKYU

JOURNAL

OF

SHINSHU STUDIES

No.64 January 2020

Published by

SHINSHU RENGO GAKKAI

The Research Association of Shinshu Studies

Kyoto Japan